

この単元で活用する題材 (教材「三重の文化」掲載ページ)

七里の渡跡 (4) 刻限日影石 (8) まんぼ (9) 東海道とお土産 (17) 紀州鉱山 (86)

単元名と単元目標

【教科名・分野名】 社会・歴史的分野 【単元名】 産業の発達と都市

【単元目標】

- ・江戸時代に農業、漁業、鉱業などの生産技術が大きく発達したことを理解することができる。
- ・交通網の整備が近世の都市の発達につながったことを理解することができる。

題材と単元との関わり

- ・本単元は、江戸幕府による政治の安定を背景に、17～18世紀に、農業をはじめ漁業、鉱業などの産業が発達したことを学ぶ。三重県においても、当時の農業を円滑にするための工夫が取り入れられたという史料が多々存在している。また、県南部に発達した鉱山についての史料もある。これらを紹介することにより、当時の人々の苦労を身近に感じるとともに、自らも調査してみようという意欲を高める効果が期待できる。
- ・三都とよばれる大都市を主な起点として交通網が整備されたことを知る場面で、三重県にも東海道における重要な地域として整備されていた都市が点在することを、史料および地図から考えさせたい。また、宿場町について調査する意欲につなげたい。

単元の展開 (全4時間計画)

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
1次 (2時間)	<p>【単元を貫く問】江戸時代の産業や交通はどのように発達したのだろうか。</p> <p>産業の発達と都市1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業の発達   <ul style="list-style-type: none"> ・漁業と鉱業 	<ul style="list-style-type: none"> ○既習事項である、室町時代までの農業の工夫を想起させる。 ○いなべ市に見られる、「刻限日影石」「まんぼ」を紹介し、それらが登場した背景について、幕藩体制下の財政安定化と絡めて考えさせる。 ○各地に見られる江戸時代の農業の工夫について、図書室、コンピュータ室を活用して調べ、簡単なレポートにまとめさせる。 ○江戸時代に製錬技術が高まったことをおさえ、鉱産物がどのようなことに活用されていたのかを考えさせる。 <p>【三重の文化】 刻限日影石 (p8) まんぼ (p9) 紀州鉱山 (p86)</p>

教材「三重の文化」を活用した授業構成案 (木曾岬町作成)

産業の発達と都市 2

- ・にぎわう三都と交通網の発達



七里の渡跡と一の鳥居 (桑名市提供)



四日市・広重の浮世絵 (四日市市立博物館提供)

2次 (2時間)

- 江戸時代の江戸、大阪、京都の各都市を比較しながら、それぞれの特色をまとめさせる。
- 地図史料により、五街道が江戸を起点に広がっていったことを理解させる。
- 「七里の渡跡」「東海道とお土産」を紹介し、江戸時代の桑名や四日市がどのような都市であったのかを考えさせる。

発問例

- ・東街道が整備された桑名や四日市を通過したのものには、どのようなものがあるのだろう。

- 街道の整備は、参勤交代の定着、確実な年貢納入に不可欠なものであったことや、関所を設けるなどして、宿駅の治安を守っていたことを理解させる。
- 他地域の宿場町と、その特色について調査したものを簡単にまとめさせる。

【三重の文化】七里の渡跡 (p 4)

東海道とお土産 (p 17)

【振り返り】江戸時代に三重県の産業や交通がどのように発達したかまとめよう。

教材研究(参考となる書籍・Webサイト等)

七里の渡し跡

桑名市教育委員会文化財ホームページ <http://bunka.city.kuwana.mie.jp/html/bunkazai/032.html>

桑名市観光ガイドホームページ <http://kanko.city.kuwana.mie.jp/pickup/shichiri/index.html>

刻限日影石

いなべ市観光協会ホームページ <http://www.kanko-inabe.jp/tourism/513/>

まんぼ

農林水産省「各地に残る水土里の足跡」 http://www.maff.go.jp/j/nousin/sekkei/museum/m_kakuti/35_manbo/

四日市宿 (東海道とお土産)

歴史街道ガイド「東海道五十三次を歩く⑤四日市～鈴鹿峠琵琶湖～三条大橋」(講談社 SOPHIA BOOKS)

紀州鉱山

熊野市紀和鉱山資料館ホームページ <http://kiwa.is-mine.net/index.html#idou>

この単元で活用する題材 (教材「三重の文化」掲載ページ)

七世 松本幸四郎 (P 1 1) 藤堂高虎 (P 3 4)

単元名と単元目標

【教科名・分野名】 社会・歴史的分野

【単元名】 中世から近世へ

【単元目標】

織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを通じて、近世社会の基礎がつけられていったことを理解させる。

題材と単元との関わり

- ・藤堂高虎は、初めは浅井軍の一員として戦ったが、その後、主君を変え、秀吉の弟秀長の元で戦い、秀吉の天下統一に向けて尽力した人物である。高虎の人生を教材化し、学習への興味付けとしたい。
- ・安土桃山時代の文化で出雲の阿国が歌舞伎を始める。現代でも残る「松本幸四郎」という名と東員町という地域教材を使うことで関心を高めたい。

単元の展開 (全 3 時間計画)

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
一 次 (2 時 間)	<p style="text-align: center;">【単元を貫く問】 信長・秀吉・家康の時代の名残は地域にも残っているのだろうか。</p> <p>○ヨーロッパ人の来航と信長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉄砲の伝来 ・キリスト教の伝来 ・楽一楽座など信長の事業 <p>○秀吉の天下統一と江戸幕府の成立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刀狩、太閤検地 ・朝鮮出兵 ・秀吉の死 ・関ヶ原の戦い <div style="text-align: center;">  <p>重要文化財藤堂高虎像 (四天王寺提供)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p><発問>家康が高虎を信頼していたと考えられる理由を読み取ろう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・下線 (破線) 部をもとに、信頼と考えられる理由を説明する。 ・下線 (破線) 部のうち、信頼の根拠としないという意見も出させ、多面的な考え方を身に付けさせたい。 <p>例) 津・上野への転封</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>信頼されていたから要所を任せた</u> ・<u>信頼できないから危険な場所においた</u> 	<p>○信長や秀吉の統一事業をみていくなかで、高虎が活躍した戦いを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・浅井長政軍の足軽として姉川の戦い、秀吉の弟・秀長のもとで中国攻め、賤ヶ岳の戦いなどに従軍、文禄・慶長の役にも参戦 <p>○教材「三重の文化」の記述から、秀吉に仕えた高虎が後には家康と強いつながりを持つにいたったことに着目させ、高虎の人間像に迫る。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【教材「三重の文化」の記述 (抜粋)】</p> <p>高虎は外様でしたが、家康の信任が厚く、津・上野への転封は大坂城の豊臣氏を監視させる目的があったといわれています。また、1611年には京都二条城で、家康と豊臣秀頼の会見の接待役を務めているほか、2代将軍秀忠の娘和子を後水尾天皇に嫁がせることにも尽力しました。晩年には、ほとんど視力を失った状態で江戸城での夜話会に出席する際、3代将軍家光から駕籠に乗ったまま城内に入ることを許可されたといわれています。</p> <p>高虎は、1630 (寛永 7) 年、75 歳で死去し、江戸の上野寒松院に葬られました。墓碑は津の寒松院と伊賀市上野の上行寺にもあります。また、日光東照宮にも墓碑があり、家康と高虎の関係の深さがうかがわれます。</p> </div>

教材「三重の文化」を活用した授業構成案 (東員町作成)

	<p>○安土桃山時代の文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出雲の阿国が歌舞伎を始め桃山時代に流行していたものの共通点に視点をおき、どのような特徴をもち、どのような人々が作りあげたものか話し合う。 <p>例) 雄大な天守閣を持つ城、華やかな障壁画・屏風、三味線、優れた陶磁器、小袖・木綿の普及 など</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>新興大名や町衆の経済力と気風を反映した、豪華・雄大で活気あふれる<u>開放的</u>な文化</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>「この頃、かぶき踊りというものが踊られた。出雲の巫女を名乗る国という女性が、京に上り、<u>変わった風体の男の扮装</u>をして踊った」</p> <p>『当代記』 出典：公式 HP 歌舞伎 on the web</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・阿国の踊りに人気が集まった理由の一つとして、男装に着目させ、当時の文化の特徴の一端である開放的な一面を感じ取らせたい。 ・桃山時代に出雲の阿国が歌舞伎を始める。その歌舞伎の中で大きな功績を残した「七世 松本幸四郎」にスポットをあてる。東員町子ども歌舞伎に参加している生徒に歌舞伎を説明してもらい、理解を進めたい。【三重の文化】(P11「七世 松本幸四郎」)
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">二次 (1時間)</p>	<p>○江戸幕府の成立と支配体制の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幕府による大名統制、鎖国政策、身分制度の確立、農村の様子 <p>○鎖国下の対外関係と町人文化の形成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オランダ、中国との交易 ・朝鮮との交流、琉球の役割 ・産業や交通の発達、北方との交易 ・各地方の生活文化 <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p><発問> 朝鮮通信使の通った経路から外れていた津市で朝鮮通信使をまねた唐人踊りが生まれたのはなぜだと思いますか。</p> </div> <p>(予想される反応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異国をめずらしく感じたから ・朝鮮の文化に関心を持ったから ・朝鮮との交流を意識したから ・生活や文化に余裕が生まれたから 	<div style="text-align: center;">  <p>津市分部町の唐人踊り</p> </div> <p>○高虎を藩祖とする津藩は、朝鮮通信使との関わりがあり、唐人踊りにつながることに触れたい。【三重の文化】(P28)</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【教材「三重の文化」の記述(抜粋)】</p> <p>高虎の霊を合祀する八幡神社の祭礼として、2代藩主高次によって始められたのが津祭です。城下の各町が行った出し物の一つに、県の無形民俗文化財に指定されている分部町の唐人踊りがあります。朝鮮通信使をまねたものといわれ、現在も保存会の人々によって受け継がれています。</p> </div> <p>※朝鮮通信使を模したと言われているもので、今日にも伝わるものとして鈴鹿市の唐人踊りや、岡山県瀬戸市牛窓の唐子おどりなどがある。</p>
<p>【振り返り】唐人踊りや歌舞伎が長い時を超えて今も残っている理由をまとめよう。</p>		

教材研究(参考となる書籍・Webサイト等)

藤堂高虎が登場する部分を編集した「葵～徳川三代～」 動画
 三重県インターネット放送局 「東員町こども歌舞伎」 動画

この単元で活用する題材（教材「三重の文化」掲載ページ）

松尾芭蕉（P72） 大黒屋光太夫（P26） 本居宣長（P38）

単元名と単元目標

【教科名・分野名】社会・歴史的分野

【単元名】産業の発達と幕府政治の動き


【単元目標】・諸産業の発達の様子と理解させ、それらが発達した理由を考えさせる。

- ・町人文化や地方の生活文化に関心を持たせ、このような文化が広がった背景を理解させる
- ・幕府による代表的な改革をとりあげて、その主な内容と改革が必要となった理由を考えさせる。
- ・江戸時代における学問の発達を理解させ、その中に新しい時代を切り開く動きがあることに気づかせる。




題材と単元との関わり

郷土出身の大黒屋光太夫は、鎖国時代に外国へ行き、日本へ帰ってきた貴重な人物である。彼が感じた日本とのギャップは相当なものであったと推測される。それを生徒に考えさせることにより、鎖国がどういった状態なのかをより実感させたい。また、彼が持ち帰った情報は、幕府にとって重要である反面、幕府体制を揺るがしかねないものである。幕府の諸外国に対するその後の対応からもそれがうかがえてくることに気づかせたい。

単元の展開（全7時間計画）

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
2 次 (1時間)	<p>【単元を貫く問】郷土出身の松尾芭蕉・大黒屋光太夫・本居宣長らは、どのような人物だったのだろうか。</p> <p>都市の繁栄と元禄文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三都の繁栄 ・元禄の学問と文化 	<ul style="list-style-type: none"> ・三都をはじめ、江戸時代に都市が発達した理由を政治や経済のしくみなどから考えさせる。 ・綱吉の政治の特色を理解させる。 ・独自の俳諧を確立させた松尾芭蕉をはじめとするこの時期の文化の特色を理解させる。 <p>【三重の文化】松尾芭蕉（P72）</p>

教材「三重の文化」を活用した授業構成案（鈴鹿市作成）

<p>5次 (1時間)</p>	<p>外国船の出現と幕府の対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ロシアをはじめとする外国船の接近   <p>大黒屋光太夫の経路(赤色の線)</p> <ul style="list-style-type: none"> 幕府の対応とその後の動き 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸時代の鎖国政策を復習しておく。 「三重の文化」の写真を見せ、描かれているのがどのような人物かを考えさせる。 ↓ 大黒屋光太夫のロシアでの動きを知る 仲間との別れ・ロシア皇帝に謁見 日本とのギャップ ↓ 帰国後、光太夫の処遇と、光太夫が日本に与えた影響を考えさせる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> </div>
<p>7次 (1時間)</p>	<p>新しい学問と化政文化</p> <ul style="list-style-type: none"> 国学と蘭学 化政文化 教育の広がり 	<ul style="list-style-type: none"> 国学においては、本居宣長が『古事記伝』をあらわして大成させ、その後の尊王攘夷運動に影響を与えたことを確認する。 大黒屋光太夫がもたらした外国の情報が、蘭学の発展に貢献したことを確認する。 寺子屋や藩校が各地に設けられたことにより、教育への関心が高まってきたことを理解する。 <p>【三重の文化】本居宣長（P38）大黒屋光太夫（P26）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>【振り返り】 郷土出身の松尾芭蕉・大黒屋光太夫・本居宣長らの業績や果たした役割についてまとめよう。</p> </div>

教材研究(参考となる書籍・Webサイト等)

産業の発達と幕府政治の動き

- 1 農業や諸産業の発達
- 2 都市の繁栄と元禄文化
- 3 享保の改革と社会の変化
- 4 田沼の政治と寛政の改革
- 5 外国船の出現と幕府の対応
- 6 天保の改革
- 7 新しい学問と化政文化

この単元で活用する題材 (教材「三重の文化」掲載ページ)

谷川士清 (P35)、本居宣長 (P38)、野呂元丈 (P43)

単元名と単元目標

【教科名・分野名】社会・歴史的分野 【単元名】江戸時代の学問[国蘭学]と化政文化

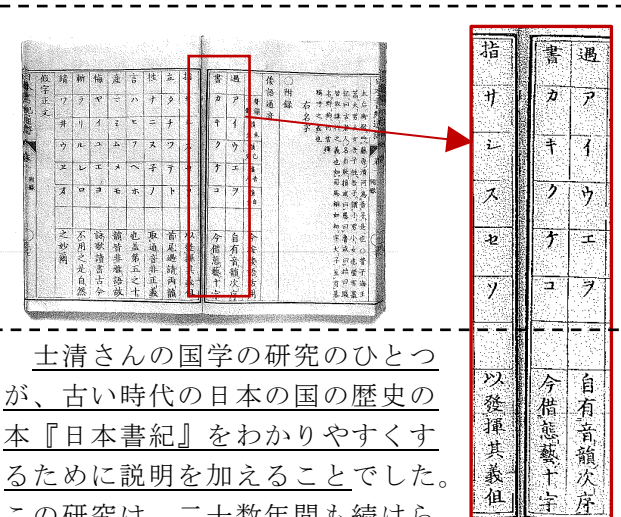
【単元目標】

新しい学問・思想や文化の特色を身近な事例や代表的な事例に関する資料から読み取り、多面的・多角的な考察を通じ、理解することができる。

題材と単元との関わり

郷土出身の谷川士清は、「日本書紀」の研究に熱心に取り組み、また、日本初の本格的な国語辞典である「和訓栞」を編集している。士清が江戸時代に行った研究が、現代にまでつながる貴重な業績であることを考えさせたい。

単元の展開 (全3時間計画)

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
1 次 (1時間)	<p>【単元を貫く問】江戸時代に学問の研究がなされたのはどうしてだろう。</p> <p>○谷川士清の残した業績 (右資料参照)</p> <p>(発問) 谷川士清が残した業績のすごいところはどこだろう。</p> <p>(まとめ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 医者として、学者としての生涯 医者としてだけでなく、「洞津谷川塾」や「森蔭社」とよばれた塾や道場を開いて門人に学問を教えた、学者としての生涯に触れさせる。 ↓ 日本初の動詞活用表 (『倭語通音』(右資料) や本格的な国語辞典『和訓栞』の編集は、現代にまでつながる貴重な業績であることをとらえさせる。 ・ 国学者としての「日本書紀」の研究 松阪出身の本居宣長と同じ国学者として、「日本書紀」の研究を行ったことを知らせる。 ↓ 宣長との関わりに関心を持たせる。 	<p>指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連</p>  <p>士清さんの国学の研究のひとつが、古い時代の日本の国の歴史の本『日本書紀』をわかりやすくするために説明を加えることでした。この研究は、二十数年間も続けられ、のちに『日本書紀通証』(全35巻)としてまとめられました。これは大変な努力のいる研究で、学者としての士清さんの名を高めました。さらに、その中の第1巻付録である『倭語通音』は、わが国最初の「動詞活用表」となりました。これを読んで感心した宣長さんは士清さんに手紙を出し、ふたりの間に学問の交流がはじまりました。</p> <p>出典: パンフレット「日本ではじめて五十音順の国語辞典をつくった谷川士清」(2009 谷川士清生誕300年記念事業)</p>

教材「三重の文化」を活用した授業構成案 (津市作成)

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
2 次 (2時間)	<p>○新しい学問と教育の広まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国学…日本の古典を研究する学問 ・ 蘭学…オランダ語でヨーロッパの文化を学ぶ学問 <p>(発問) 鎖国を続けていた江戸時代の後半に蘭学が発達したのはなぜか。</p> <p>(予想される生徒の反応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オランダとは貿易を続けていたから ・ 将軍吉宗が西洋の学問に着目したから ・ 西洋では医学などが進んでいたから ・ 元丈らによって研究が始められたから <p>↓ (思考の焦点化) 学問発達の背景を探索</p> <p>(発問) 元丈はどんな気持ちで蘭学の研究を続けたのだろうか。</p> <p>(予想される生徒の反応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 将軍の命を受けて仕方なく ・ 幕府の役人として安定したい ・ 西洋の学問を日本に広めたい ・ 薬や医学で人々を救いたい <p>↓</p> <p>(まとめ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 諸産業の発達とともに、庶民の間においても知識の必要性は高まっていった <p>○教育の広まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 藩校や寺小屋が普及した <p>○化政文化の特色</p> <p>(発問) 元禄文化と化政文化の特色の違いを文学や美術作品から見つけだそう。</p> <p>(まとめ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上方から江戸へ、地方へ ・ 文化のにない手は庶民へ ・ 滑稽さや洒落がもてはやされる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 士清や宣長らにより国学が発達するとともに、蘭学が発達したことをおさえる。 【三重の文化】 谷川士清 (P35) 本居宣長 (P38) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【三重の文化】野呂元丈 (P43) 抜粋</p> <p>紀州藩主徳川吉宗が八代将軍になり、武芸と実学(実践で役立つ学問)が奨励されるようになると、多気町波多瀬出身の野呂元丈が幕府に取り立てられました。元丈は、幕府お抱えの本草学者として活躍しました。元丈は仲間と一緒に全国各地へ薬草採集に出かけ、草木を研究しました。元丈は医者でもあったので、病人にとっての薬草の必要性を十分に理解していたのです。また、日本最初の狂犬病に関する治療法を説いた医学専門書を著しました。47歳の時に、元丈は御目見え医師(将軍に直接会える医師)に任用され、幕府の中で安定した地位を得ました。将軍吉宗は西洋の学問に着目しますが、当時、江戸にはオランダ語を理解する幕府の役人はいませんでした。そこで吉宗は、青木昆陽と元丈にオランダ語の習得を命じています。二人は西洋の学問の研究をしました。これが日本の蘭学の始まりです。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 寺小屋では「読み・書き・そろばん」を中心に教えられたことから、庶民が教育に求めたことをとらえさせる ・ 芸術・芸能の変容に着目し、文化の社会的な基盤が拡大したことに気づかせる 例】浮世絵、歌舞伎、滑稽本、狂歌・川柳など <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【振り返り】江戸時代後半の学問の発達や教育の広まりの様子について、教科書の記述を確認して、本単元のまとめをする。</p> </div>

教材研究(参考となる書籍・Webサイト等)

パンフレット「日本ではじめて五十音順の国語辞典をつくった谷川士清」(2009 谷川士清生誕300年記念事業)

教材「三重の文化」を活用した授業構成案 (松阪市)

この単元で活用する題材 (教材「三重の文化」掲載ページ)

- ①本居宣長 (P 3 8)
- ②宝塚古墳 (P 4 1)
- ③斎宮跡 (P 4 6)

単元名と単元目標

【教科名・分野名】社会・歴史的分野 【単元名】身近な地域の歴史
 【単元目標】古代から近世までの日本の歩みを三重県の歴史的人物や遺構や遺物を取り上げながら歴史学習を身近に感じさせる。

題材と単元との関わり

- ・ 郷土の遺跡である宝塚古墳と斎宮跡について、これらに関わる歴史的全体像を学習しながら考古学についての学習についても深めさせたい。
- ・ 本居宣長が生涯を通じて何を残したのかを知り、郷土の国学者への興味・関心を高めさせる。

単元の展開 (全 6 時間計画)

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
1 次 (2 時 間)	<p>【単元を貫く問】調べ学習を通じて、三重県の歴史を見てみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校での既習事項をもとに、本居宣長の生きた 1730 年から 1801 年までの日本の政治・経済・社会の動きについて調べる。 ・ 宣長についての史料を学ぶ。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>【三重の文化】(P38) の記述の抜粋 …宣長は、歌や『源氏物語』が人を感動させる秘密は、人は「もののあはれを知る」心を持っているからだと考えます。「もののあはれ」とは、嬉しいこと、悲しいこと、また四季の移り変わりなど、物の変化に敏感に揺れ動く心をいいます。…</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>本居宣長</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ a ~ c のそれぞれの内容について深入りせずに簡潔に学べるようにプリントを準備するなどの対応をする。 ・ 宣長の生きた時代背景を学習した上で、宣長の生い立ちから生涯の功績についての調べ学習を図書室でしたり、宿題として取り組ませたりする。 ・ 宣長が特に主張した「もののあわれ」について考えを深め、日本の歴史と日本人の精神に関心を持たせる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 古墳の出現と大和政権 <ul style="list-style-type: none"> a 古墳の形 b 古墳の中 c さまざまな埴輪 d 大和政権の始まり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 古墳時代についての知識と理解を深める。 ・ 図や絵などの資料を配り説明する。 ・ 2000年(平成12年)に宝塚古墳で舟形埴輪が見つかった経緯について説明する。 ・ 文化財センターのHPや図書館等の書物を用いて調べ学習をさせ、発表させ、興味・関心を深める。 【三重の文化】宝塚古墳 (P41)
2 次 (2 時 間)		

教材「三重の文化」を活用した授業構成案 (松阪市)

次	主な学習内容	指導上の留意点 教材「三重の文化」との関連
3 次 (2 時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・宝塚古墳について分かったことをまとめる。 【古代日本の歩み】 <ul style="list-style-type: none"> ・大化の改新 ・平城京 ・平安京 ・貴族の生活 ・斎王と斎宮について <ul style="list-style-type: none"> ・伊勢神宮の歴史 ・壬申の乱と天武朝 ・斎宮制度について <p>(発問の例)</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">Q 1. まぼろしの都「斎宮」とは、どんな都か？</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">Q 2. 斎王に選ばれた人物は、どういう人たちだったのか？</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">Q 3. 斎王たちの物語について言い伝えられていることはないか？</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">Q 4. 斎宮の宮殿での生活は、どんなものだったか？</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">Q 5. 宮殿跡で発見されたものは何か？</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">Q 6. 斎宮から近い松阪市は、斎宮とかわりはないのか、調べたり、考えたりしてみよう。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">【振り返り】 本居宣長や斎宮についてわかったことや新たな疑問についてまとめよう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・斎宮についての歴史的背景について深入りせずに簡潔に学べるようにプリントを配るなどの対応をする。 ・伊勢神宮について、プリントなどを活用し学習させる。20年に1度行われる式年遷宮にもふれ、伊勢神宮と斎宮とのかかわりを理解させる。 ・視聴覚教材を活用し、パソコン機器などが使える学習教室で調べ学習などをさせて発表させたい。 ・写真や図や資料HPから読みとったこと考えたことをまとめさせ発表させる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>【三重の文化】斎宮跡 (P46) の記述 (抜粋)</p> <p>斎宮跡は、飛鳥・奈良時代から鎌倉時代ごろまで、天皇の代理として伊勢神宮に奉仕する斎王が住んだ御殿や、それにとまなう事務を行った古代の役所跡です。…また、多数出土した緑釉陶器の量は、当時の地方都市である太宰府をしのぎ、平安京と肩を並べるほどです。また、このほか斎宮寮で働く役人や斎王の世話をする女官、雑用係などの住まいもあり、総数 100 棟以上の建物が建ち並び、都などから来た 500 人を超える人々が生活をしていました。斎宮に住んだ斎王は、天皇の親族の中の娘や姉妹などの未婚の女性から、占いの儀式によって決められていました。…</p> </div>

教材研究(参考となる書籍・Webサイト等)

- Web サイト
- ・本居宣長記念館
- ・松阪市文化財センター
- ・本居宣長記念館
- ・斎宮歴史博物館
- ・三重県埋蔵文化財センター